



講師：酒井和人氏(中日新聞記者・元モスクワ支局長)

日ロ友好愛知の会 講演会

私の見たロシア、これからの日ロ関係

「二島先行返還」にカジを切った安倍政権

5 月 13 日、名古屋国際センターにて、日ロ友好愛知の会の総会とあわせて中日新聞記者・酒井和人氏(元モスクワ支局長)の講演会が行われました。昨年 12 月のプーチン大統領訪日と首脳会談を受けて、領土交渉はどう進むのか。酒井氏は「今回のプーチン訪日で領土はゼロ回答」、「安倍官邸は『二島先行返還』で条件整備を進めている」との見立て。モスクワ特派員時代に取材した日本外交の裏側など興味深い話を聞くことができました。

愛知の会と酒井和人記者の了解を得て、講演録を掲載させていただきます。(編集部)

ペテルブルグ大学に留学

中日新聞社には留学制度があり、支局のある国で 1 年間語学留学をさせてくれます。その制度を使い、2005 年夏から 1 年間、ロシアのサンクト・ペテルブルグ大学に留学しました。その後、08 年から 3 年間、モスクワ支局で特派員として勤務しましたが、留学はなぜモスクワでなくペテルブルグにしたのか。プーチン大統領はサンクトペテルブルグ大学の出身ですし、メドベージェフ首相もそうです。ロシアは官僚社会で、モスクワ大学出身者が大きな勢力をもっているのは事実ですが、当時はプーチン氏が力をつけるに従ってロシア政界でサンクト派と呼ばれる人たちが勢力を伸ばしてきたところでした。

「北方領土は日本のもの、でも返さなくてもよい」

留学中は、大学の語学研修センターでひたすら語学の勉強をしていたわけですが、たまに東洋学部の日本語学科をのぞく機会があり、先生に頼まれて少しジャーナリズム論の講義をしたことがあります。ロシア人の学生 30 人ほどにアンケートを取ると、「北方領土は、日本とロシアどちらの国のものと思うか」という質問で、「日本のもの」という答えが「ロシアのもの」という回答より少し多かった。15:14 くらいとわずかな差でしたが、驚きました。彼らは、今後の日露外交を担うかもしれないエリートたちです。では、「北方領土を日本に返すべきか」という質問には、これは全員が見事に「返すべきではない」と答えました。つまり、歴史的には日本の領土

であるかもしれないが、返さなくてもいいと考えているわけです。

何故なのか。ロシアでは、北方領土は第二次世界大戦で獲得した戦果と考えられており、メディアなどでもそういう取り上げ方をされています。第二次世界大戦はロシアでは大祖国戦争と呼ばれており、対ドイツ戦で 2000 万人以上の膨大な犠牲を払った。とくにレニングラード(現ペテルブルグ)は 900 日にわたる包囲を受け、餓死を含む多くの死者を出した。そういう苦しい戦争を戦って、その延長線上で得たものの一つとして北方領土もあると考えられています。それを何故返さなければならないのかという素朴な感情があります。このような考え方はロシアの一般民衆にもあるし、若い世代やエリート層の中にもあるわけです。

ロシア人の日本イメージは良好。常に「好きな国」の上位

ロシア人の一般的な対日観はどうか。ロシア人の日本イメージは良好で、日本人は尊敬されているというか、重きを置いて見られていると思います。ロシアの世論調査で、好きな国・嫌いな国を尋ねると、日本は常に好きな国の上位に入っています。

一方で、ロシアは非常にプライドの高い国です。地球上の陸地の 6 分の 1 を占める巨大な国であり、資源大国です。冷戦時代には超大国としてアメリカとともに世界に君臨した。そのようなことも含めて、大国意識をロシア人は持っている。その大国がかつて戦争に負けたのが日露戦争です。「われわれはナポレオンにも勝ったし、ヒトラー・ドイツにも勝利したけれども、東郷平八郎に負けた。」とロシア人の学生に言われたことがあります。ロシア人は決して軽くは日本を見ていないと思います。

一般的に言って、ロシア人は日本とは仲良くしたい、政治・経済・文化など様々な交流と協力を拡大したいと思っています。これはロシアの政官財一致した考えだと思います。そこで両国間に引っかかっているトゲが北方領土問題です。このトゲを抜いて平和条約を結びたいとロシア側も考えている。しかし、日ロ交渉が進むかという、なかなかうまく進んでこなかった。日ロ交渉は螺旋状に同じところをグルグル廻っている感じでなかなか進展していないというのがこれまでのところでは。

日本外交の裏側～メドベージェフの国後島訪問

日ロ外交の裏側を少し話しておく、2000 年代初めの 10 年間はロシアに対する日本の外交力がかなり低下した時期でした。

2010 年 11 月にメドベージェフ大統領(当時)がロシアの元首としては初めて北方領土(国後島)を訪問した。これに日本側は大反発して日ロ関係は冷却化しました。実はこの時、メドベージェフの国後訪問情報を私はかなり早い段階、8 月ごろにはつかんでいました。ウラジオストクの通信員(ロシア人記者)から『極東艦隊のパイロットが要人來訪で待機命令を受けている』という情報があり、日本大使館に確認してみたのですが、その頃はまだ大使館スタッフは「ただのウワサだろう」という程度の認識でした。そのうち、ウラジオストクの地元紙が大統領のクリール(北方領土)訪問を記事にしたのですが、その時点でも日本大使館は「噂は聞いているが詳細は把握してない。ロシア側のブラフ(脅し)で、実際には行かないだろう」という見解が支配的でした。そのうち、ロシアの大統領府のいわゆる記者クラブで『取材同行ツアー』の募集が始まり、「もうこれは事実だろう」ということになった。当時は民主党政権でしたが、当然日本政府はロシアに強く抗議します。しかし、メドベージェフは国後訪問を強行し日本政府は面目を失いました。現地情報をちゃんと掴んでいなかった、掴んでも正確な分析ができなかったということで、当時の河野雅治大使は更迭されました。



「失われた 10 年」。日本の対ロ外交力低下の 2000 年代

この外交的失点は日本の対ロ外交力の低下を如実に物語っています。端的に言うと、2002 年の『ムネオ疑惑』に端を発した外務省内の混乱で、鈴木宗男氏(衆議院議員)や佐藤優氏(外務省主任分析官)ら当時、北方領土交渉の最先端を担っていた人たちが「国策」と思えるような捜査によって失脚させられたことが、大きな原因でした。

現在は作家として活躍している佐藤優さんはノンキャリアでしたが非常に優秀な人で、情報収集力に長けていました。かつて社会主義だった国での情報収集は非常に難しい。

マスコミで言えば、ロシアの役人に直にアクセスするのはほとんどできない。たとえば外務省で取材する場合、日本だったら記者証だけで入っていけるのに、ロシアでは事前に申請書を出して許可をとらないと入れない。許可をとるのに 1 カ月もかかることがある。そこで外務省 OB や省内にツテのある学者などを通じて間接的に取材したりする。外交官も表面的な交渉はできるが、いわゆる腹を割ってというか、人間同士のつきあいまではなかなかできない。佐藤さんには批判も多いのですが、こうしたつきあいをできたのは佐藤優さんだけだったとロシア人の知り合いから聞いたことがあります。

鈴木さんを庇うつもりはまったくありませんが、現実問題として、鈴木宗男さんや佐藤優さんが日ロ外交の現場からいなくなってから、北方領土交渉は停滞感が強まることになりました。鈴木さんたちが交渉の念頭に置いていたのは「2 島先行返還」(歯舞・色丹の 2 島の返還と、国後・択捉の交渉継続)ですが、これが国内の保守派から「2 島返還だけで手を打とうとしている」と攻撃されていた。2 島先行返還なのか、4 島一括なのか、面積を等分で分ける「3.5 島」というものもありますが、この混乱の後、日本政府の軸足は定まらず、領土交渉は迷走してしまいます。日本外交において 2000 年代は「失われた 10 年」と呼ばれることもあります。

プーチン大統領のもとで再び動き出した日ロ交渉

メドベージェフの国後島訪問で日露関係が険悪になっていた時、首相だったプーチンは沿海州の会議に出席していたのですが、北方領土には一言も触れませんでした。何も言わないことも一つのメッセージです。

プーチン大統領のマインドを考えると、彼は柔道の有段者で、柔道を通じて「日本の精神」をよく理解している政治家です。娘のエカテリーナさんがペテルブルグ大学東洋学部で日本語を学んだのも、そのことと無縁ではないと思います。プーチン大統領は、北方領土問題を解決しようという意思を持っている。少なくとも 1956 年の日ソ共同宣言にもとづいて、歯舞、色丹の 2 島は日本に返してもいいと考えているのは間違いない。

ロシアは中国とも領土問題をかかえていましたが、アムール川(黒龍江)にある大ウスリー島を半々に分割する解決をしています。北方領土も「3.5 島(面積で二等分)」までは考えの範疇でしょう。クリミア半島の併合では非常に強権的な面を見せましたが、プーチン大統領は北方領土問題に関しては柔軟な態度をとっています。実はこの 10 年～15 年間で見ると、彼が大統領の時だけ日ロ交渉の機運が進展しています。2012 年に 2 期目の大統領に就任してプーチン時代は最長 2024 年まで続く。この任期中に日本との領土問題を解決しようという意思を彼は必ず持っていると思います。

「二島先行返還」で安倍官邸も GO サイン

一方、安倍首相も最終的な方向性としては、かつて鈴木宗男氏らが推進した「2 島先行返還と残る 2 島の交渉継続」でこの問題の解決をはかろうとしているように思われます。安倍さんが個人的に北方領土問題に深い関心をもっているかどうかは別として、「北方領土問題を解決した首相」として名を残したいと考えていることは間違いないでしょう。

昨年 12 月のプーチン大統領訪日と日ロ首脳会談の結果は、こと領土問題について言えば「ゼロ回答」でした。領土問題で具体的な進展はなかった。首脳会談ではたくさんの経済協力協定が結ばれましたが、経済協力についてはこれまで何度も言われているし、過去に締結されたプロジェクトも多くが途中で頓挫しています。今後の日露関係がどう進むかはまだ見通せませんが、安倍さんとプーチンさんの体制が今後も続いていけば、領土交渉が進展するチャンスはあります。

4 月 27 日からの安倍首相訪ロでは何故か鈴木宗男氏が特使で「先乗り」しています。鈴木宗男氏の復権を印象づけるもので、裏読みすれば「2 島先行返還」論の復活を意味するものでもあり、この路線で安倍首相は GO サインを出しているのだと見えます。ロシア側もこの線であれば乗って来ることができます。

これまで「四島一括返還」で固まっていた日本の保守派の主張も以前よりは強くない。もともと『四島返還論』は日本の意向というよりはアメリカの意向でした。「ダレスの恫喝」と言われていますが、日ソ国交回復交渉で歯舞、色丹の 2 島返還で手を打とうとした日本政府に「2 島返還で満足するなら沖縄は返さないぞ」とアメリカのダレス国務長官が恫喝した話は有名です。当時は米ソ冷戦下で、アメリカは日本の対ソ接近を極力排除したかったのです。今は当時とは大きく状況が違い、米ロ関係も大きく変わっている。先行きは非常に危ういものがありますが、トランプ大統領は基本的に、ロシアには友好的です。4 島一括でなくとも、まず 2 島でも返還が実現すれば支持率は上がるというのが安倍官邸の判断ではないかと思えます。少なくとも「二島先行返還」なら十分に可能性はあるし、それをもって平和条約が実際に結ばれれば、日ロ関係はこれまでと全く違う大きな発展を遂げると思えます。

経済関係の方に言わせると、ロシア経済は、不確定要素があるとはいえカントリーリスクはあまりない。エネルギー価格の動向に左右される弱点はあるが、産業基盤はこれから育ってくるところで「伸びしろ」があるし、人口も 1 億 3000 万人とそれなりの魅力ある市場でもある。隣国であり、ヨーロッパでもあり、観光資源も豊富で魅力がある。今後政治的な問題が解決されれば、日ロが一気に緊密化して、一種の「ロシアブーム」が来るのではないかと個人的には期待しています。(2017 年 5 月 13 日、名古屋国際センターにて)

【留学記】 ミンスクでの留学生活

静かな環境で勉強したい人に「一押し」

藤田 勝利(上智大学ロシア語学科・4年生)

自分は 2016 年の 4 月から 10 カ月間、ベラルーシ共和国の首都・ミンスクでロシア語留学をしました。

ミンスクを選んだ理由～治安の良さと物価の安さ

ロシア語を学ぶために、なぜ本場のモスクワやサンクトペテルブルグではなくミンスクを選んだかということ、ミンスクはとにかく治安が良いからです。モスクワやペテルブルグ、キエフに留学した友人たちは、皆必ず何かを盗まれたという思い出話をしてくれるのですが、自分の場合そのようなハプニングは一切ありませんでした(だからと言って外国は外国です。これからミンスクに留学する人は油断しないようにしてください)。2 つ目は物価の安さです。ジャガイモ 1 キロ 25 円、他の食材も日本の 3 分の 1 程度の値段で買えてしまいます。レストランやカフェも日本より安く、オリジナリティのある店が多い印象を受けました。物価が安くて日本では味わえないものが沢山ある。治安が良くて安全である。こういった環境がミンスク留学のいいところだと思ったわけです。

小さいけれど味わいのある街

この 2 つの理由を並べると、学科の先輩から「それだけの理由で行くと、ミンスクは何にもないからつまらなくて痛い目見るよ」と脅されました。けれども、実際に 10 カ月間留学生活を送ってみて感じたのは、ミンスクにはいろいろ見るべきものがたくさんあるということです。

確かにミンスクは小さな町で、1 日あれば主な観光地を回ってしまえることができます。東京に比べると娯楽施設も少ないです。しかし、街にはゴミ一つ転がってない。昼と夜で違う景色をのぞかせるきれいな通りや、中心部を占める緑の多い心地よい公園。店ごとに個性の異なる様々なカフェやレストランと、接しやすくてつい話し込んでしまう店員さんたち。これらは日本では味わえないミンスクのとても貴重な美点です。自分は 2 人の友人と一緒に留学したのですが、理由はそれぞれ異なるけれど、3 人ともまたミンスクに行きたいと強く願っています。

自分は予定がないときは「探検」と称して街中にある未発見の店やイベントを探してよく散歩したのですが、その度に新しい発見をしました。つまりミンスクは、観光ブックには載っていない、そして他の町にはない、ミンスクだけの場所が探せば探すほど見つかる町なのです。